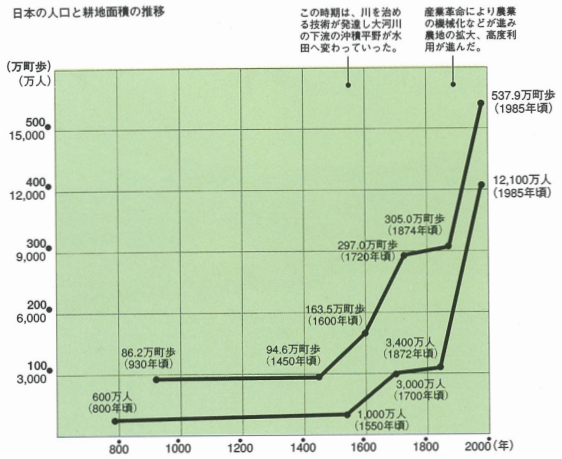
川と風土雑感

リバーフロント研究所長　小池　達男

1．はじめに

先ず、図をみて頂きたい。この図は日本の人口と耕地面積の推移を示したものである。

西暦 800年頃から1550年頃の間の人口は 600万～ 1000万人耕地面積は90万ha～ 130万haときわめてゆるやかな伸びである。



戦国時代から江戸中期の1550年～1700年の間に人口は1000万人～3000万人、耕地面積は 130万ha～ 300万haと共に約３倍に急伸している。江戸中期から幕末までは、また緩やかになるが、明治初期から現在に至る、約 120年間の伸びはすさまじい。人口は3400万人から 12100万人と４倍弱、耕地面積は 300万ha～ 540万haと約２倍弱と激増している。明治以降の我が国の人口と耕地面積の増は、かつて経験しなかった速度であった。文明開化、殖産興業、日清、日露の戦争、第１次、第２次大戦と単語を並べるだけでこの 120年間のめまぐるしさが感得できる。社会基盤整備が効率最重要視で実施されたのも当然であろう。

高度な土地利用が沖積平野を中心に行われ、国土の10%を占めるにすぎない河川氾濫域内に人口の約50%、資産の75%が集中している現在があるのは、明治以降の近代的な河川改修、水資源開発の賜といっても過言ではないであろう。しかし、限りある国土の中で増大の一途を辿るのは不可能であり、この図にみる勾配は、これからはもっと緩やかになり、江戸中期～幕末あるいは平安～戦国のような勾配に近づくと思われる。従って、これからは効率重視よりも、ゆとりをもった、日本人の感性、風土に合った川づくりが求められる。昨年の３月に出された河川審議会の答申「今後の河川管理のあり方」にもはっきりとうかがえる。

2．自然への感受性

中国の古典である論語と老子に、水に関する有名な文章がある。即ち、「逝くものは斯くの如きか昼夜を舎かず」と「上善は水の如し」である。

「文章は経国の大業、不朽の盛事なり」と言う通り、中国の詩文は只管、道徳や政治や君子としての志を述べる。自然そのものを対象とし、その状況やうつろいを直かに述べることはなしとはしないが、甚だ少ない。あったとしても大半は自然の風物に託しての心情や、心の吐露であるように思われる。

それに較べると我が国の和歌、俳句等は自然そのものを端的にうたいあげているものが甚だ多い。もちろん以心伝心でその仮託した作者の心情を察し、思いやるのが読み手の義務（？）といえるのかも知れない。この両者の相違の因は種々あげられるであろうが、我が国の風土に求めるのが最も納得出来るのではないだろうか。

アジアのモンスーン地域に属し、弥生時代以来稲作農耕を営み、水に関心を持たざるを得ない生活は、自然の移ろいに対し、鋭敏な感性をうえつけた。

西村敦氏(1) によると、平安期の貴族達は、自然の情緒を理解することは人生を美しく生きるための大切な知恵と考えており、その身につけるべき教養として四季おりおりの自然の情緒を理解し、それにふさわしい応対をすることが出来なければならなかった。

そういう自然を理解する能力のあるなしを当時の言葉で「心あり」「心なし」と言っている。この「有心」「無心」あるいは、「幽玄」がやがて時代を下って、後に「わび」「さび」へと展開してゆくものである。

日本人の自然現象への関心の深さの一斑は、例えば、あの豊富な季語をみれば明らかである。雨に関する言葉だけでも菜種梅雨、春霖、春時雨、五月雨、梅雨晴れ、空梅雨、虎が雨、夕立、驟雨、喜雨、入梅、梅雨、梅雨寒、梅雨明け、秋時雨、秋霖、時雨、寒の雨等々。その繊細な語彙は自然に対する細やかな心配りの賜であろう。この様な伝統文化を継承するような川づくりを目指したいものである。

「川と風土に関する懇談会」で座長の芳賀教授が、日本人の自然に対する感受性の素晴らしさを示したものとしてあげられたうたを紹介すると、

「ぬばたまの夜の更けゆけば楸生ふる清き川原に千鳥しば鳴く」（山部赤人）
「最上川支流は山にうちひびきゆふぐれんとする時にわが居つ」（茂吉）

3．心のふるさととしての川

電車に乗って川を渡るとき、川面に眼が行く。海辺に行くと広々とした水面をみながら思わず深呼吸をする。街中に噴水があると子供は喜んでじゃぶじゃぶと池に入って行く。

人はなぜ水に惹かれるのか、水面をみるとなぜホッとするのか。一説によると生命は先ず海に生じ、進化につれて陸地にあがってきた。その太古の記憶がそうさせるのだと、人は母親の胎内の羊水の中で育つ。その羊水の成分は海水に近いそうである。太古の歴史は人の生誕の過程で圧縮したカタチでよみがえる。

真偽は別にして、水辺に水面に魅力を感じ、水辺をみると穏やかな懐かしみに似た感情が生起するのは事実である。

心のふるさととしての川は、人によって様々であろうが、子供の頃よく遊んだ家の近くを流れる小川や、水路をあげる人が多いようだ。

「春の小川はさらさらゆくよ」「山は青きふるさと、水は清きふるさと」「小鮒つりしかの川」等々の歌に憧れと懐かしさを感じる人が多いであろう。

そして、その川は「清き川」であるはずだ。我が国の河川は元来全て清流であった。「三尺流れれば水清し」が日本の川である。そこに霊力を感じ、「みそぎ」をしたり、「流し雛」「若水汲み」が始まったのだ。

清き川でなくなったのは、河川の浄化能力以上の負荷が河川にかかった為である。孫引き(2) で恐縮だが、フランスの哲学者バシュラールは「汚れた川に対して、特殊で理屈にあわぬ無意識な直接的嫌悪を覚えない者があろうか。」と言っている。汚濁した水にたいして嫌悪感を覚えるのは、洋の東西を問わぬらしい。

これまでの水質対策は専ら、汚濁河川を浄化することに腐心してきたし、これからもそうであろうが、現在清流である川をいつまでも清流のままに保全することも重要である。

そのため、清流の定義、意義、効用を明らかにし、清流を保全するための施策、清流を生かしての地域振興等の研究を始めようとしている。

最近、人の川ばなれが問題として挙げられている。要因は種々挙げられる。端的にいうと川に直接接しなくても生活が成り立っているからだろう。池澤夏樹氏(3) が面白いことを言っている。「川ばなれしたのではなく、各家庭が川を自宅に取り込んでしまったのだ。」というのである。上水道と下水道はそのまま川を形成する。以前には川のほとりで堂々と行ったことを、今我々は家の中でこっそりと恥ずかしいことのようにやっている。夜中に耳を澄ませば冷蔵庫の中を流れるせせらぎの音が聞こえる。

日本人の各自が抱いている心のふるさととしての川、それを現出させるのがこれからの川づくりである。

4．自然に任す、ゆだねる

我が国は台風や梅雨により、思いがけない洪水に見舞われたり、日本海側では大雪になったりする。人力では抗し難いこれら災害に対し、忍従し、受容しながら生活を営んできた。日本人はこれら自然の猛威に対しては敵対することをやめ、自然に逆らわず順応してきた。和辻氏は次のように言っている。「日本の人間は自然を征服しようとせず、また自然に敵対しようともしなかった。に関わらずなお戦闘的、反抗的な気分において持久的ならぬあきらめに達したのである。」これから私が連想するのは、宮沢賢治の「アメニモマケズ」の詩であり、その散り際の潔さを愛でる桜である。

明治の近代的な河川改修以前の治水の方法をみても洪水を制圧するのではなく、集落を守るための輪中堤を築造したり、あるいは霞堤や乗越堤等、一定の流量以上になると氾濫させる方式をとっている。

多自然型川づくりや、これからの海岸保全事業は、まさに我が国が風土として培ってきた人間の手は最小限におさえ、自然の営為に任す、委ねることを指向している。自然に対して謙虚であろうとする感覚こそ我が国の風土に根ざしているといえるのであろう。

（1）西村　敦「王朝びとの四季」講談社学術文庫
（2）樋口忠彦「水と日本人」
（3）池澤夏樹「母なる自然のおっぱい」新潮文庫